

起つた。秋の夜は死の如き静けさの中に更けて行く。

翌朝、眼醒めると、湖畔は何時の間にか白衣を纏ふてもはや研爛の秋は何處へか辭し去つた

後だつた。

山と湖と温泉と、而して静寂閑雅なる環境と、日光の山奥、湯本温泉は實に若者の樂園である。

登別温泉

(ストープス嬢の日本日記)

(明治四十二年)九月七日——私は登別へ來て宿つた。停車場から十哩ばかりで、それは村落の外では未だ曾て私の見たことのない悪い道路がついてゐる。如何して我々はその谷地とわだちを通り、如何して車輪があれ程ひどく前後左右に傾いて覆らずにゐられたか不思議でたまらぬ。途中で日はとつぷり暮れる、道の後半分は小さい阪を無茶苦茶に降りたり轍の上でガタついて來て、車と谷との間に纔か一呎ばかりの餘地しかなかった。が何事も起らなんだ。

九月八日——私は昨晩は半活動火山の火口中に泊つた!と言つた程はこわくなかつた。火

口はさし渡およそ一哩で、大部分深い森林になつた圓い溪の様になつてゐる。旅館から二三百碼の處に活動の名残があつて、孔や小さい圓錐や煮え湯の泡立つてる流れや硫黄がごつさり堆くなつた處などがある。煮える池の或る者が黒く堅さうに見え、或ものには小さいゲイサーがシュ〜と噴いてゐるが、大概のはおとなしく傍へ寄つてもよいが、二つ三つ危険で近寄れぬのがある。旅館の庭を眺めると、泡を立てゝ流れる熱湯の河から湯氣が雲を成して立つてゐるが、此の湯を利用して浴びるのである。案内書には馬鹿正直に「登別温泉へ行つて唯一つ困る

のは時として裸體の入浴者に出會ふことである」と書いてるが、私は「必ず出會ふこと」と言ひたい。然かし私は森の中の徑を傳ひに獨りで行つた——此處へ來て浴びて見ぬのは馬鹿らしいから——而して途中で一時間に三つの蛇を見たが、其一つは長さ四呎ばかりもあつて、中々路から動かなんだ。すつかり入墨をした一人のアイノに出會つて、互にまづい日本語で二三の挨拶をした。アイノ語は奇妙に硬い言語で「カ」行ばかり多い。

九月九日——濕つばい細雨きんぐをぼふる日であらゆる風景が模糊として樹木と青空と雨と硝黄臭い煙とが一つになる。空氣は鬱陶しく腐れ卵の臭に充ちる。私は此處にゐる唯一人の歐羅巴人で純然たる日本風に生活する。此の場處にはまるで我々西洋文化が觸れてゐぬ。私の居間は土地の藝術の片玉で、入口の襖、窓の障子の輕妙な木造の格子造りや漆塗りの縁奇麗な金屬の火鉢と胴の膨れた鐵瓶など上等の純日本製である私は心から此んな居間をロンドンへ持つて行つ

てみたい、簡素の美に對する本來の概念を幾らか保持する新藝術の追隨者をさぞ嬉しがらせることと思ふ。しかし我は寧ろ熱い氣の詰まる煙を免れたかつて、晩に室蘭に着く。是は奇麗な小さい港で立派な天然港を成した入江で、夜九時に船に乗つた。

此の溫泉は室蘭の東北六里の北海膽振國幌別郡登別村に在つて、安政五年武州本庄の移民瀧本金藏といふ人が長萬部ながまなべから引移つて開いた溫泉場である。三つの浴場が設けられて瀧の湯(明礬泉 九八度)下の湯(食鹽泉、九一度)萬壽湯(塩類泉、三八度)の三つ異つた性質の者があり、全く俗塵を離れた仙境であるといはれるのはストープス嬢の記事から察せられ、今は溫泉宿十數軒もあるといふから、多少は變つても環境は依然として翠を涵かべた好避暑地である。北海道には尙ほ札幌の西南七里餘の定山溪溫泉(石狩國豐平町)がある。越前の僧定山が開いたもので、道廳に近いので近來是も頗る繁華となりつゝある。